



# ロリータ、わが人生の光、 わが腰部の炎。 わが罪、わが魂

## 『ロリータ』(1955年) ウラジーミル・ナボコフ

### 背景

キーワード  
禁制本

### 前史

1532年～64年 フランソワ・ラブレーの『ガルガンチュアとパンタグリユエル』が、パリのソルボンヌ大学から卑猥だと非難される。

1759年 風刺的な内容のために政府と教会当局から発禁処分を受けたにもかかわらず、ヴォルテールの『カンディード』が大量に売れる。

1934年 ヘンリー・ミラーの『北回帰線』が、性描写を含むことからアメリカで発売禁止となる。

### 後史

1959年 薬物常習者が語り手であるウィリアム・バロウズの『裸のランチ』が、1962年にボストンで発禁処分を受けるが、決定は1966年に覆される。

1988年 サルマン・ラシュディの『悪魔の詩』が、イスラム教の神を冒瀆しているとされ、10か国以上で発禁処分となる。

文学の歴史には、発禁や検閲処分を受けた本がたびたび登場する。20世紀前半には、文学の実験が嗜好の限界を押しひろげて、保守的な読者に衝撃を与えた。それに対して徹底した検閲がおこなわれ、たとえばアイルランドの作家ジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』などから猥褻な表現を見つけ出し、イギリスの作家D・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』からは性的な描写を取り除いた。しかし1960年に無修正の『チャタレイ夫人の恋人』が裁判で無罪となってからは、イギリスのポルノグラフィ文学の出版規制は事実上廃止された。世界的に見ても書籍の検閲は緩和されたが、まだ完全撤廃には至っていない。

### 受け入れがたいことを受け入れる

ウラジーミル・ナボコフの問題小説『ロリータ』は、人々を魅了すると同時に攪乱する力をいまでも保っている。1955年にフランスで出版されたあとに発禁処分を受け、1959年にロンドンであらためて出版されたこの小説は、語り手のハンバート・ハンバートのある魅惑的な少女につ

いての妄想に基づいている。少女は9歳と14歳のあいだの思春期にあり、細身で絹のような肌を持った美形で、タイトルのロリータは、その後幼い妖婦を指す英語になった。

『ロリータ』で、不穏な話に対する正常な反応をことごとく覆す語り手に共感するにつれ、読者は混乱する。ハンバートの閉鎖的な空想のなかで、謝罪の弁、文学作品の引用、ことば遊び、狡猾なウィットなどを交えた用意周到な防御が施され、読者は都会的なヨーロッパの教授に魅了されて判断力を失っていく。

### 妄想の呪縛

フランスのリヴィエラに住む少年が少女アナベルに恋をした——これがハンバートの妄想の原型である。何年もあとにアメリカで「アナベルが別の少女に転生し」、彼は「その呪縛から解放された」。それがドロレス・ヘイズ、つまりハンバートが下宿する家の女主人の12歳になる娘で、愛称ロリータである。衝撃的な事態が展開するのは、ハンバートが妄想の対象のロリータに近づこうと目論んで、その母親と結婚してからである。新

参照 『ガルガンチュアとパンタグリユエル』72-73 ■ 『ボヴァリー夫人』158-63 ■ 『ユリシーズ』214-21 ■ 『一九八四年』250-55 ■ 『ブリキの太鼓』270-71 ■ 『「吠える」ほか』288 ■ 『アメリカン・サイコ』313 ■ 『悪魔の詩』336

文学には、人々の意識を変え、従来のイデオロギーを覆す思想を伝える力があるため、たびたび当局から脅威と受け止められる。政治色の強い内容や、あからさまな性的描写や、宗教への中傷と見なされて、国家や州や図書館から長期にわたって禁制処分となった本には意外なものもある。



妻の殺害を企てる漠然とした計画は、妻が車に轢かれて無用となる。ハンバートは残された義父の立場で、サマーキャンプに参加していたドロレスを迎えにいき、自身の夢を実現する試みを開始する。

### 言語に恋して

淫らな描写がほとんど見られない「エロティック小説」の第2部では、作者の真の恋愛関係——相手は言語——が語

られていく。きわめて精巧で、華麗かつ抒情的な散文体によって、ハンバートはドロレスとの1年にわたるアメリカ横断の旅をつなぎ合わせていく。幻想的、映画的な記述がつづくなかで、ハンバートのひとりよがりの情熱を傾けていく細部(口論、危機一髪事態、機嫌とり)が断続的に浮かびあがる。1年後に東海岸にもどってドロレスを学校に入れると、ハンバートの幻想の枠組みが崩れはじめ

る。この作品の文体、構造、描写は通常のポルノグラフィ小説では見られないものである。ハンバート・ハンバートは究極の信頼できない語り手であり、話からはじまる前から結末が未解決だと告げる架空の作家の序文によって守られている。ほかの説明はなく、擁護しがたいものを擁護するハンバートの死後の声だけが読者へ語りかけている。■

### ウラジーミル・ナボコフ



1899年4月、サンクトペテルブルクの貴族階級の一族に生まれたウラジーミル・ナボコフは、幼少時代をロシアで過ごし、成長するにつれ、英語、フランス語、ロシア語の3言語を自在に話すようになった。1917年のロシア革命のあと、1919年に一家でイギリスへ亡命し、ナボコフはケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジで学んだ。さらにベルリンへ移ったのち、ジャーナリストであり政治家でもある父親が政治集会で暗殺された。ベルリンとパリに住んでいるあいだ、テニスコーチ兼家庭教師として働くかわら、ロシア語で小説、短編、詩

などを執筆した。1925年にヴェラ・スロニムと結婚し、息子ドミトリをもうける。第2次世界大戦のさなかにアメリカへ逃れ、その後に英語で『ロリータ』を執筆。ウェルズリー大学やコーネル大学で教鞭を執り、さらには蝶研究の権威として、ハーヴァード大学比較動物学博物館で研究員をつとめた。1977年、スイスのモントルーにて死去した。

### ほかの主要作品

1938年 『賜物』  
1962年 『青白い炎』